

目次

いま、TOKが必要とされる理由..... iv

第1部 国際標準を教えるフロンティア 1

対談 どこへ向かう世界の教育

IBプログラムのこれまでとこれから

津田和男 (国際国際学校) × 島野雅俊 (セント・ポールズ校) 聞き手 後藤健夫 (大学コンサルタント)

第2部 セオリー・オブ・ナレッジ：TOKとは 16

第1章 TOK概要..... 17

- 1.1 知識とは..... 18
- 1.2 「知の理論」の学習..... 22
- 1.3 「知の理論」の誕生秘話..... 25
- 1.4 国際的な視野..... 29
- 1.5 この本の使い方..... 35
- 1.6 TOKの学びがもたらすもの..... 40

第2章 知るための方法..... 41

- 2.1 「知るための方法」とは..... 42
- 2.2 「知るための方法」としての「言語」..... 46
- 2.3 「知るための方法」としての「知覚」..... 53
- 2.4 「知るための方法」としての「理性」..... 60
- 2.5 「知るための方法」としての「感情」..... 70
- 2.6 「知るための方法」としての「直観」..... 79
- 2.7 「知るための方法」としての「記憶」..... 88
- 2.8 「知るための方法」としての「想像」..... 96
- 2.9 「知るための方法」としての「信仰」..... 103

第3章 知識の領域..... 113

- 3.1 「知識の領域」と「知識の枠組み」..... 114
- 3.2 範囲・応用..... 120
- 3.3 言語・概念..... 131
- 3.4 方法論..... 140
- 3.5 発展の歴史..... 146
- 3.6 個人的な知識とのつながり..... 153

第3部 「知の理論」を日本で教える 157

鼎談 TOKを取り入れることで、日本の

高校の授業も先生も、生徒も変わる

福島浩介 (関西学院千里国際中等部・高等学校) × ダツタ・シヤミ (東京学芸大学) × 後藤健夫 (大学コンサルタント)

どこへ向かう世界の教育 IBプログラムのこれまでとこれから

津田和男 × 島野雅俊 聞き手 後藤健夫

Kazuo TSUDA
国連国際学校

Masatoshi SHIMANO
セント・ポールズ校

Takeo GOTO
大学コンサルタント

グローバル人材の育成が求められ、大学入試改革が進む中で改めて注目を集める国際バカロレア (International Baccalaureate: IB)。
4種類あるIBのプログラムの中でも、
高校レベルのディプロマプログラム (Diploma Programme: DP) は国際的に通用する大学入学資格を取得でき、世界の主要大学の入学審査等で広く活用されています。
日本でもIBの普及拡大を図り、2018年までにIB認定校などを200校に増やすという目標が掲げられています。
そのために文部科学省では、これまですべて英語で実施する必要のあったDPを日本語でも可能とするプログラム (日本語DP) の開発・導入に数年前から着手しています。
IBの教育プログラムの中核を成すのが、セオリー・オブ・ナレッジ (Theory of Knowledge: TOK、知の理論) です。
従来の教科の垣根を越え、学際的な観点から知識というものを捉えること、言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を深めること、論理的思考力と客観的な精神を育成することなどをめざしています。
そんなTOKのコンセプトを日本で初めて翻訳のうえ、出版するのが本書です。
そこで、IBプログラムの実践家であり理論家としても知られる津田和男さんと島野雅俊さんに、今なぜIBなのか、IBのこれまでとこれからの展望について伺いました。

TOKを取り入れることで、日本の 高校の授業も先生も、生徒も変わる

福島浩介 × ダッタ・シャミ × 後藤健夫

Kousuke FUKUSHIMA

関西学院千里国際中等部・高等部

Shammi DATTA

東京学芸大学

Takeo GOTO

大学コンサルタント

関西学院千里国際中等部・高等部(SIS)は、関西学院大阪インターナショナルスクール(OIS)とキャンパスを共有する中高一貫校です。これら2つの学校は、関西在住の帰国生徒・一般の日本人生徒・外国人生徒のために、日本や海外の最高の教育システムや教育技術を、校舎・授業・課外活動・理念・経験・夢を共にしている2つの学校へと採りいれて実践するために1991年に設立されました。たとえば、音楽、芸術、体育の授業は、SIS、OISが合同で実施されています。これらの授業の言語は英語ですから、特に海外経験があるわけではなく、中学1年に入学した生徒は、音楽や芸術、体育を学びながら、英語を使いこなしていかなければなりません。両校はホールも図書館も体育施設も共有しています。学園祭・体

育祭のような学校行事も一緒に開催されますし、クラブ活動も一緒に行います。SIS、OISは、授業の言語が日本語、英語と異なったり、学年の区切りがズレていたり、カリキュラムが違ったとしても「一体である」ことが強い理念として存在します。この「一体である」ということが実は大きなポイントです。いま、高校に国際バカロレア機構(IBO)の認定を得て「IBDPコース」ができていますが、多くは20名程度の定員のコースが既存の高校の中にできるに過ぎず、これまでの高校と「一体的である」ことを、運営上、求められているはずです。つまり、これから全国にできるであろうIBDPコースと既存の高校との関係は、SISとOISの「一体である」関係がモデルになり得るわけです。